

「青葉タイム」で分かる実感を 持たせ、学び合う力の土台を育む

京都府 舞鶴市立青葉中学校

舞鶴市立青葉中学校は、学力下位層を支援するため、習熟度別学習「青葉タイム」や生徒会による学習支援など、3年間を通して実施。一方で、行事の実施時期を見直すなど、学習のリズムを意識した指導プランを立てている。

課題

- ・生徒指導上困難な状況が続き、学力が低下
- ・特に学力下位層の学習参加への意欲が低い

実践

1 4月を「学習を頑張ろうとする時期」に

- ・入学直後を「生徒も教師も学習を頑張ろうとする時期」と位置付ける
- ・家庭訪問の時期をずらし、修学旅行の準備を軽減して、授業に集中できる環境をつくる

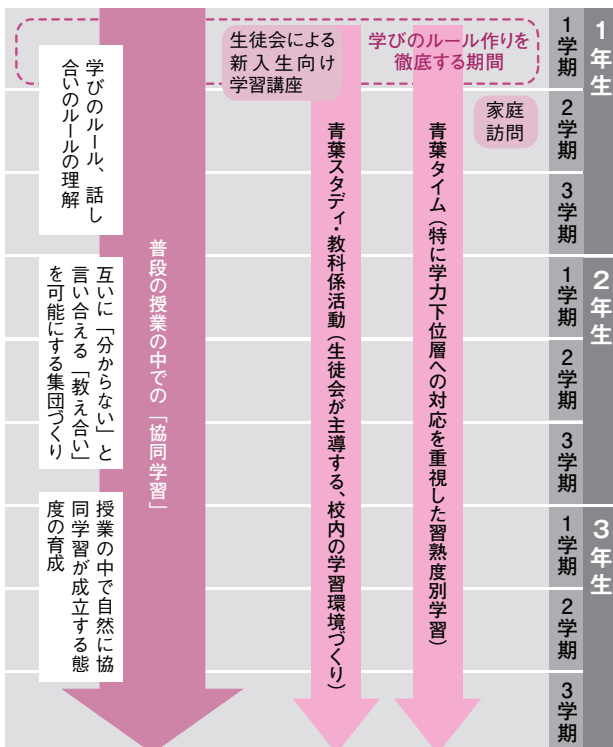
2 「青葉タイム」による下位層の理解度向上

- ・下位層でも習熟度の違いに注目し、3グループに分ける
- ・習熟度の低いクラスには生徒2、3人に教師1人を配置

3 生徒会や教科系の生徒が学習指導

- ・教科系の生徒を中心とした自主学習の推進
- ・生徒会役員による1年生に対する学習指導
- ・普段の授業の中で協同学習を行う

3年間の指導の流れ



School Data

◎校区には商店街、農村、団地が混在し、多様な家庭の生徒が通う。卒業生との交流が盛んで、毎年6月開催の学校行事「輝け青葉デー」(合唱コンクールなどを開催)には全国から卒業生が駆けつける。



校長◎櫻井秀之先生

生徒数◎552人 学級数◎18学級(うち特別支援学級3)

所在地◎〒625-0052 京都府舞鶴市字行永1810

TEL◎0773-62-4612

URL◎<http://aoba.maizuru.ed.jp/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

「青葉タイム」での学習 学力下位層に手厚い

舞鶴市立青葉中学校は、港湾都市として発展した舞鶴市の東部にある。長らく生徒指導に追われ、学力的に厳しい状況が続いていたが、2006年度に京都府から、08年度には文部科学省から研究指定を受けたのを機に、学力向上に向けた校内研究を始めた。その際、重視したのが学力下位層への対応だ。櫻井秀之校長は、その理由を次のように説明する。

「下位層の生徒は、授業でいわば『お客さん』になってしまっています。仲間や教師との信頼関係がうまく築けず、それが生徒指導上の課題にもつながっています。まずはそうした生徒に『分かる実感』を持たせ、学校生活への参加意欲を高めることが必要だと考えました。生徒集団が『共に学ぶ』意識を持たない限り、学力向上は難しいと考えたのです」

そこで着手したのは、学校行事の実施時期の見直しだ。新入生入学直後の4月を「生徒も教師も学習を頑張ろうとする時期」と位置付け、授業以外の教育活動をできるだけ入れないように配慮した（P.18）。「入学時の指導で中学校生活3年間が決まる」（櫻井校長）という発想がその背景にはある。

一方、火曜から金曜の昼休み後の20分間は、全校学習会「青葉タイム」を教育課程外の時間として設定した（P.18）。クラスの枠を超え、

学年を習熟度別の3グループに分け、理解度に応じた学習活動を行う。グループ分けにあたっては、下位層のクラスを細分化し、5段階評定で「3以上」「2」「1」に分けた。教師の配置にもメリハリをつけ、最も習熟度の低いクラスではほぼマンツーマンで教師がつき、基礎基本レベルの内容をプリント学習などで定着させる。1学年主任の加藤雅弘先生はその効果に手応えを感じている。

「『青葉タイム』では下位層の中で学力差に着目しました。その結果、『この時間は分かる実感があるから好きだ』という感想を寄せる下位層の生徒も現れました。効果は毎日の授業にも表れ、学習規律が次第に確立してきたと感じています」

生徒自らの力で 学びに前向きな人間関係を築く

学習環境の整備には、生徒会も大きな役割を果たす。例えば、生徒会活動の一環として、クラスには各教科に1人の「教科係」がいる。宿題や自主学習ノートの回収の他、授業終了時に「本時の振り返り」を口頭で行い、授業を受ける姿勢や学習内容の理解度などについて感想を述べる（P.19）。3学年主任の堺谷正人先生は、教科係の影響力を高く評価する。

「クラスの誰もが認めるその教科のエキスパートが教科係になります。3年生ともなると、教科係の生徒が提案したことに皆がつい

ていきます。自主学習ノートの提出も、教科係が励ますから、生徒は頑張るようです」

こうした活動を通して育みたいのは、「協同学習」が日常的に成立する校風だ。

「生徒全員が共に学び合い、教え合う関係を育てていきたいと考えています。そのため授業改善にも既に着手しています。教師と生徒が同じ目標を持ち、共に学ぶ中でこそ、下位層の生徒も生き生きと学習に向かうようになると考えています」（櫻井校長）

それまで京都府の平均を下回っていた学力検査の点数が平均以上になるなど、取り組みの効果は確実に現れている。また、全国学力・学習状況調査の結果では、生徒の学習意欲が全国平均を上回った。「教師の授業力だけでなく、生徒の支援力で互いに高め合ったからこそ得られた結果です」と櫻井校長は話す。



舞鶴市立青葉中学校
堺谷正人 Sakurai Masatoshi
3学年主任。保健体育科担当。「前向きに熱くなる、そういう生徒になってほしい」



舞鶴市立青葉中学校
加藤雅弘 Kato Masahiro
1学年主任。数学科担当。「子ども自身気付けていない良さを気付かせてあげたい」



舞鶴市立青葉中学校校長
櫻井秀之 Sakurai Hideyuki
「愛を持ち、思いやりを持った子どもになってほしい」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

1 4月の2週間で授業規律を確立させる

■行事を工夫し、授業時間をしっかり確保

「授業規律の確立には最初が肝心」と、慌ただしい4月にも授業時間を確保する。それまで4月に行っていた家庭訪問を8月に変更。更に、5月の連休明けにある2年生の修学旅行を見直し、従来、班別だった自由行動をク

ラス別行動にして準備時間の軽減を図った。生徒も教師も授業に集中できる環境を整え、

早期に学びに向かう雰囲気をつくっていく。特に1年生には、学びのルールをきめ細かく指導する。最も効果を発揮しているのは、

生徒会役員による1年生への指導だ。生徒会

2 昼休み後20分間の「青葉タイム」で下位層の底上げを図る

■手厚い指導で下位層の意欲を高める

「青葉タイム」は、火曜から金曜の昼休み後20分間を利用して全校で行う補充学習だ。1、2年生は習熟度別に分かれる「コース別学習」と、4人1組による「協同学習」を週2回ずつ、3年生は週4日共「協同学習」を行う。教科は数学と英語が中心だ。コース別学習では、成績に応じて3コースに分かれる。

A：5段階評価で1。生徒2、3人につき教師1人が指導

B：同2。生徒二十数人による一斉授業。各教科の教師2、3人が入る

C：同3以上。担任が協同学習を指導する

下位層の中の学力差に対応しているのが特徴で、特にAコースはほぼマンツーマン指導

だ。普段、授業についていけない生徒にも分かる授業となり、教師に気兼ねなく質問できる。ここで「出来る」という達成感を覚えさせ、学ぶ意欲を育み、更には生徒と教師の信頼関係を築こうとしている。

■「分かる授業」の重要性を再認識

下位層対象の補充学習は以前、教師個々の対応にとどまっていたが、学校全体として対応しようと06年度の2学期から「青葉タイム」を始めた。すると、生徒が前向きになると共に、教師の意識も変わってきたという。

「指導中、生徒は『分かった』と喜びを表現するようになりました。そうした姿は以前は見ませんでした。

図 「青葉タイム」で使用するプリント

下位層の支援を目指した取り組みだけに、出題の難易度に配慮する。授業中に理解が不十分な生徒に丁寧に指導できるため、下位層の生徒にとっては「分かる実感」が得られる貴重な時間となっている



上記のプリントは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/c0112/>

生徒の笑顔を見て「授業が分かることは大切だ」という意識が教師に芽生え、毎日の授業への取り組み方も変わりました」（堺谷先生）

では、生徒自らプリントを作成し、教室を回って新入生に自主学習の方法を教える。「教師からの説明より、生徒会の先輩に言われた方が生徒はしっかり聞きます。先輩の指導が学習の動機付けに果たす意義は大きいものがあります」（櫻井校長）

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

3 生徒自ら学びに向かう環境をつくる

■生徒会が運営する「自主学習ノート」

生徒の学びに向かう姿勢を育むために、生徒会士の支援も大きな役割を果たす。

生徒会は、「青葉スタディ」の運営を担う。

これは、「自主学習ノート」を提出し、クラスごとに提出率を競うという取り組みだ。生徒会は、年度当初に各クラスを回り、ノートの良い取り方や家庭学習の方法などについて説明・指導。また、自主学習ノートの回収と点検も行い、提出率を発表する。

また、クラスでは教科ごとに1人の生徒が

「教科係」を担当する。授業の終わりにクラスの学習態度を評価し、次の授業へ向けての提案も行う。

教科係には当該教科の得意な生徒が任命されるため、3年生ともなればクラス全員が一目置くようになる存在だ。教師と同じ目線で次へ向けた改善点を指摘する教科係もあり、その発表内容は教師にとっても生徒にとっても大きな刺激となっている。

4 1年生から学び合い、教え合う人間関係をつくる

■最初に協同学習のルールを徹底させる

同校が最終的に目指すのは、生徒同士が学び合い、教え合う「協同学習」だ。既に授業研究にも着手し、4人1組で話し合う活動を授業に取り入れている。

「1年生は学びと話し合いのルールの理解。

2年生は分からないことを伝えられ、教え合いが可能になる集団づくり。3年生は授業で協同的な学習が成立する態度の完成」（加藤先生）を目標とし、3年かけて生徒集団をつくらうとしている。

1年生で徹底させるルールは次の内容だ。

- ◎目標を達成するため、互いに全力を尽くす
- ◎互いに賞賛し、励まし合い、手伝い合う

◎他のメンバーが学習したり力を尽くしたりしていることに対して責任を持つ

◎他のメンバーに自分の思いや意見を伝えたり、それらの意見をまとめたりするなど、コミュニケーションを大切にす

◎学習や作業を効率化する工夫を常に考える

協同学習に不可欠な基盤として重視するのは、生徒同士が気兼ねなくコミュニケーションできる関係の構築だ。学活を中心にグループワークなどを行い、仲間づくりの機会を設け、少しずつ誰とでも話せる関係がつけられるようにしている。更に「青葉タイム」において下位層を重点的に指導し、生徒が皆、学びに向かう姿勢を持てるようにしている。

■学び合い効果で生徒を積極的に

こうした活動を3年間積み重ねることにより、最初は4人でも互いに質問できなかったり、自分さえ分かれば他の人には教えようとしなかったりといった雰囲気、自主的に協同学習に取り組むようになっていくという。

生徒が協同学習に積極的なのは、その学習効果の高さを実感するからだろう。「教え合い、注意し合える仲間がいることが子どもたちを変えます。生徒の支援力の高さには驚かされます」（櫻井校長）

これまで京都府の平均を下回っていた学力検査の点数は、現在では府の平均を上回っている。



授業の終わりに、まとめを発表する「教科係」の生徒。その日の授業態度や学習内容などについて振り返ると共に、次の授業に向けた提案なども行う。生徒自身の手で学習環境を整える仕組みが同校には根付いている